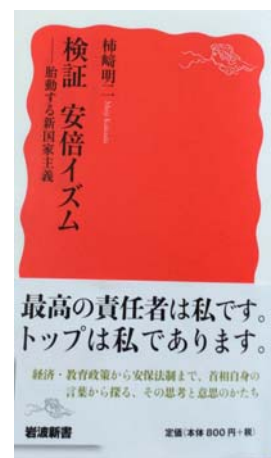


『検証 安倍イズム』を読む

第2次安倍政権が誕生して3年近くになる。この間、アベノミクスに始まり、特定秘密保護法、集団的自衛権行使容認の閣議決定、そして先の9・19戦争法の強行「成立」など、「アベ政治」なるものを注視してきた。個々の政策はとともに、「アベ政治」をマクロにどう評価するかに関心があり、いくつかの論説に接してきた。

今回とりあげるのは、表題の柿崎明二・共同通信論説委員兼編集委員による岩波新書の新刊である。本書表紙カバーから「美しく誇りある」父のような国家が、国民一人ひとりを子のように指導し、守っていく。異次元緩和や賃上げ税制など経済政策から教育、憲法改正、安全保障法制まで、安倍流国家介入型政治に通底するのは「国家の善意」である。その思考と意志を、国会審議や諮問会議議事録など「首相自身の言葉」から探る。



多くの付箋を付けて、一気に読み進んだ。「アベ政治」なるものをマクロ・ミクロに理解するうえで大いに参考になった。序章の最後から一国家が、先頭に立って関係者、あるいは国民を目指す目的に導こうとする一連の手法を「国家先導主義」と名付ける。

この国家先導主義という概念を切り口に、まず、1章では経済政策を中心に、安倍の「関わっていく政治」の実像を見ていきたい。続く第2章では、集団的自衛権、教育改革や憲法改正、歴史認識など「取り戻す政治について」、3章では祖父・岸信介の影響、さらに選挙制度改革および政治改革がもたらした政治の変化を分析することで、安倍の国家観を読み解く。続く終章で「安倍イズム」＝国家先導主義の行方を考察する。

とりわけ参考になったのが、第1章の経済政策であり、ここでは人口政策を紹介しておきたい。本来政府が介入してこなかった分野、領域に直接関わっていく。曲折をたどったが故に、この安倍内閣による政策展開の構造がより鮮明に浮かび上がってきたのが、人口目標の設定だ。2014年6月24日に閣議決定された、いわゆる骨太の方針の中に「50年後に1億人程度の安定した人口構造を保持する」という人口目標が明記された。将来の人口をめぐる数値目標が閣議決定という形で掲げられたのは、太平洋戦争開戦の年である1941年に近衛文麿内閣で策定された「人口政策確立要綱」以来、実に73年ぶりの出来事である。その目的は、その後の戦争遂行に必要な人的資源、つまり軍人、軍属を確保することだった。

閣議決定までに検討の場の一つとなった「少子化危機突破タスクフォース」では、「国家と個人」という観点から反対論、慎重論が出て、数値目標の明示が見送られた。

その後、経済財政諮問会議を経て、数値目標が決まる経済財政。諮問会議における「有識者による資料提出→有識者による問題提起→議長の安倍の指示」という流れによる政策づくりは、賃上げ、「女性の活躍」政策など他のテーマでも見られたものだ。なんとしても目標を明示しようという安倍の意向がうかがえる。

(2015年11月2日)